
周りの人間がバカに見える

KAITO Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

周りの人間がバカに見える

【コード】

N20000

【作者名】

KAITO Y

【あらすじ】

学校で起こった自殺を眺める高校生のお話。

誰かを蔑み見下す事によって人間は言いよの無い快樂や安心を感じる。弱い人間は自分よりも弱い人間を例に挙げ、自分よりも優れたものを認めたがらない。教室の隅では厚い眼鏡をかけたいかにもオタクらしい外見の奴が他のクラスメイトに囲まれてからかわれていた。悪い滑舌を皆に真似され、少しでも変な部分があれば皆よつてたかつて彼を責める。僕には苦笑いしていた彼の目の色が徐々に変わっていくのが分かった。それでも皆は彼の気持ちを汲み取る事をせず、娯樂としての攻撃を続ける。

「うるせーんだよおおおお！」

悲痛の叫びと椅子の飛ぶ音が教室に響く。ざわめきが広がり、笑い声が上がった。僕は遂にキレたか、と机に目を落とした。「誰も助けられないんだよ」心の中でつぶやく。そうやって理由をつけてイジメを見過ごした事を自分自身に許してもらおうとしている自分が情けなかった。

午後の教室はいつもと違う暗い影に包まれていた。担任の教員からイジメについての注意を受けてクラスは沈黙している。イジメっ子たちはターゲットを失い、それぞれの席で漫画やゲームを楽しんでいる。共通の敵を持って団結する彼らのような集団に友情は無い。敵となる人間さえ居なくなってしまうえば脆くも団結は崩れる。まるで共通の趣味が無ければ会話のできないオタクのようだ。だがイジメはそう簡単には終わらない。その証拠に既に何人かのイジメっ子たちがまた楽しそうにコソコソと話し始めていた。

いつから僕は一番なりたくなかった人間になってしまったのだろうか。誰かが非難されているのを見ると安心してしまふ。可笑しくて笑ってしまつたりもする。やられる方の人間の気持ちは長い安定した幸福の中で分からなくなってしまうた。

外は相変わらずの雨が降っている。雨を見るのなんて何週間ぶりか

分らない。曇った空は教室の中の色を奪い、全てを灰色の雰囲気に変えていた。だが教室の隅でコソコソと次の嫌がらせを考えている奴らは楽しそうだ。反面さっきイジメられていた奴を振り返って見ると手を震わせて涙ぐんでいる。さすがに泣きはしなかったが、手が震える気持ちは分かった。

だがしばらくするとガラガラと戸の開く音がした。教室にいた皆がそれを振り返る。雨の音が湿った風と一緒に教室に流れ込んでくるのと入れ違いに、さっきのメガネ男がベランダに出ていった。無視する奴、傍観する奴、隣の席の友達とコソコソ話す奴がいたが、イジメをしていたグループは頭が狂ったんだと笑っていた。だが授業をしていた教師が何をやっているんだと止めに行こうとした瞬間にそいつは消えた。ベランダの冊を乗り越えて飛び降りたのだ。

次の瞬間、言うまでもなくクラスの空気は凍りついた。叫ぶ奴も騒ぐ奴もいない。ただただ誰もが啞然とした顔で雨の降り注ぐベランダを眺めている事しかできない。

「誰か救急車を呼べ！」

先生の声で時間が動き始める。窓際の生徒は一斉に下を覗き込み、血が出てないとか頭を打って死んでるとか言って騒ぎ立てた。それでも冷静な生徒というものはいるもので、静かに座ってソワソワしていた。僕はどうかと言えば、窓際に立って飛び降りた奴を見下ろしているだけだった。

「負けたか」

誰にも聞こえないように小さく呟く。どんな困難の中においても人間というものは信念を持っていれば切り抜ける事ができる。そしてそれが終わった後はそれを教訓として生きる事ができる。だが時々、彼のような奴がいるのだ。目の前の恐怖に臆して逃げようとする人間。何事にも立ち向かえとは言わないが、人間には引いていい限界がある。その一線を越えてしまう臆病者は、困難が終わってもそれをトラウマと言って立ち直れない。そしてもっと悪い奴はあまりの恐怖に理性を失い、命を軽視して自らの人生を絶ってしまう。彼は

最悪のパターンに当て嵌まってしまった。

「やべーよ俺らのせいになんじゃん」

「遺書とか書かれてたらまずいな」

「今のうちにあいつの机漁れ」

イジメっ子の中にも頭の働く奴がいるようだ。自分らの責任を軽くするために物的証拠を葬る。悪くない判断だ。倫理的思考の働かない奴らの中にも悪知恵のある奴がいる。そしてそういう奴に限って将来成功したりするから神は不公平だなんて嘆く人が絶えない。だがそんな一握りの才能のある人間の隣で一緒になつて悪事をするような多数の凡才たちには良い未来があるとは思えない。

「あいつを助けに行こう」

「職員室の担架を持っていけばいいんじゃないか」

「とりあえず下に行こう」

教室の反対側では別のグループも動き始めた。いつでも騒がしく明るく振る舞う自己中心的な野心家。そしてそれを取り巻く馬鹿な集団。深い考えも無いくせにクラスを引つ張ろうとする奴はどの学校にもいるはずだ。だがどう考えても神経を損傷したかもしれない人間に医療知識の無い人間が触れるというのは危険だ。その安易な判断がどんな結末を引き起こすか考える事をしない。僕の目にはそれすらがイジメっ子たちと同じように写った。

先生は助けを求めて医務室へ行つてしまい、職員が緊急会議で集められたせいで統制を失つた生徒が暴走を始める。皆雨に濡れる事も構わずベランダに乗り出して救急車で搬送されるクラスメイトの様子を眺め、救急車が雨霧の中に消えていくと今度は生死についての会議が至る所で始まる。授業中は眠そうな顔をしている奴らが事件が起きた途端に目を輝かせて話し始めた。まったく人間というものは他人の不幸に関してどこまで敏感な生き物なのだろうか。

そして一時間が経つた頃に先生が教室に戻ってきた。怒れば怖い先生だったので騒いでいたクラスメイトも皆ちゃんと席についた。

「彼は今意識不明の重体です」

どこかのニュースでよく聞く単語だ。

「これについて何か知ってる人はいないか？」

その言葉に絶望して僕は机に伏せた。誰が情報を吐くと言うのだろうか。イジメツ子たちがノコノコと自首するとも言うのか。そもそも彼の問題については先生もある程度把握しているはずだ。だったら容疑者を片っ端から洗えばいいのにそれをしない。犯人を見付ける気などサラサラ無いのだろう。

私立の進学校で自殺。それがニュースにならないはずがない。そこで校内でイジメがあつたなんて言えば学校は終わりだ。ただでさえ定員割れしているというのに本当に学校存続の危機になつてしまう。だから先生たちは会議したのだろう。彼をどう助けるか、犯人は誰かではなく、どうやって隠蔽するか、どうやって責任を逃れるか。頭をもたげたまま空を見上げると、少しだけ晴れ間が覗き始めた。どうせならこのまま雨が降り続けなければならないのに。ベルが鳴り、次の授業が始まる。僕はそのまま眠りに落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2000o/>

周りの人間がバカに見える

2010年10月9日00時11分発行